

さつぽろリンゴの名を高めた

## 水原果樹園

今の札幌では、平岸のリンゴが有名ですが、民間で最初にリンゴを生産したのは、中島公園付近にあった水原果樹園でした。

日本にリンゴが公式に導入されたのは、明治四年（一八七一年）ころ。北海道開拓使が、アメリカから、洋ナシ、桃、ブドウなどとともにリンゴの苗を輸入したのが始まりと伝えられています。

これらの苗は、東京青山の官園に植えられた後、六年（一八七三年）に開拓使本庁舎の近くの官園に移されました。この官園でのリンゴの初なりは、十二年（一八七九年）のことでした。

開拓使は、果樹栽培を奨励しましたが、進んでこれに応じたのが、水原寅蔵でした。土建業者として創設期の札幌本府の建設に携わり、商工業の振興にも貢献した人です。

彼は、九年（一八七六年）に中島公園付近で果樹園を開きました。まとまった形の果樹園としては全

国で最初の試みだったということです。

十四年（一八八一年）に、明治天皇が山鼻などを行幸されたとき、水原はリンゴを献上し、金一封を受けています。また、二十四年（一八九一年）に東京で行われた第三回内国勸業博覧会では、彼が出品したリンゴ国光は、一等有功賞牌を受賞したほど優れていました。このほか、二十六年（一八九三年）、開拓使長官の黒田清隆から、果樹園の始祖と認められ、その功績を記念して、リンゴを紋章とした黒紋付羽織一かさねを贈与されるなど、水原リンゴは名声を高めていきました。

こうして水原果樹園から始まったリンゴ栽培は、札幌村、琴似村、手稲村などを中心に白石、豊平、平岸へと広がっていったのです。



水原 寅蔵

二十七年（一八九四年）、札幌は、北海道のリンゴ栽培面積六百九十五畝の四十二割を占め、リンゴ栽培の中心になっていました。四十年（一九〇七年）に、面積は、さらにその二・七倍に広がり、全国一位の生産を誇ります。そして、国内のほか、中国やロシア、フィリピンなど海外にも出荷されるまでになりました。

明治末期に隆盛を極めたさっぽろリンゴは、その



水原寅藏のリンゴ園

後も大正、昭和の初めを通じて栽培が続けられました。昭和三十年代に入り、都市化が進むにつれて、次第に姿を消していきましたが、今も平岸のリンゴ並木などにその名をとどめています。

（平成十一年九月号・第六十回）



昭和25年にリンゴ貯蔵のために造られた軟石づくりの建物（南20西8）。現在は食事処「かしわ亭」としてよみがえっている